

第5回定期総会 ~新体制で「更なる飛躍」誓う



定期総会の参加は十六名、委任六名、議案はすべて原案通り可決した。説明事項として「e水プロジェクト」による幌向七草」をはじめ「eco田んぼオーナー企画」「フットパス・ロングトレイル」「農水省の補助事業への申請」「会報発行」が報告された。昨年、提案された「介護事業企画」は財政的問題が解消されるまで「保留」とした。また、諸般の事情で「副代表理

ふらっと南幌会報

発行元

NPO
ふらっと南幌

南幌町栄町
4丁目4番19号
378-2203

フットパス事業のほかに湿原植生再生などを円滑に推進させようと、五月十七日、第五回の定期総会が開かれ、新体制(下記表参照)で「更なる飛躍」を誓った。これに先立ち、当会理事六名が北海道開発局の担当者とともに、現在工事中の「遊水池」を視察、将来の事業への構想を模索した。

事」の不在人事も了承された。なお、農水省補助事業は七月二日付けで採択されました。

北海道開発局担当者と遊水池を視察



幌向七草再生の候補地を熱心に視察

視察に参加したのは、南幌町都市整備課二名と北海道開発局事業振興部一名をはじめ、江別河川事務所と千歳河川事務所の調査課からそれぞれ二名、㈱エコテックから二名と㈱雪印種苗から一名、当会メンバー六名の一六名。役場ロビーに集合した後に現地に向いた。幌向七草の再生とミズゴケ栽培実験の候補地を熱心に視察した。



[eco田んぼ] 近況報告

寒過ぎた春、田植えが遅れたことで心配されたイネの生育状況も、好天が続いたことで順調です。(写真)今後の近況や収穫状況は次号以降で報告して行きます。リアルタイムで知りたい方は「ブログ」をどうぞ!
[http://ameblo.jp/nanporo-tanbo/]

「新たな道」を踏査!! 千歳〜南幌六十キロ
札幌へ! 百キロのロングトレイルはいかが?
一昨年開設した札幌〜南幌のロングトレイルにドッキングさせようと、五月二四、二五の両日千歳〜南幌を歩いた。JR南千歳駅をスタート、縄文遺跡群や松浦武四郎の歩いた「古山街道」からマオイ温泉へ。その後、稜線を辿りながら「三角測量点」「長官山」を経由し南幌温泉。これで千歳〜札幌間百キロが完成。



千歳川を辿る「ロングトレイル」 ~遊水池群ウォッチング



右から、井上すみ子、木村修治、近藤長一郎の三氏。北広島市防災センターを背にピース

精力的なフットパスガイド達

勢いがついた「フットパスガイド」達は六月九日、江別市防災センターから千歳サーモンパークまで四五キロに挑戦。途中、工事中の「遊水池」も視察した。



長澤 徹明 氏



1948年東神楽生まれ。1966年北海道大学理類入学。70年同大農学部卒業。以降、助手、講師、助教授、教授を経て、2011年定年。同年名誉教授、同大学院農学研究院特任教授(併任)。12年より寒冷水土研究所主幹。2008年日本学術会議連携会員。2011年日本農業工学会フェロー。

寒冷地の農業基盤と農村景観

「湿原の保護」=辻井達一氏の遺志 石狩川フォーラム報告

産業と生活を支える巨大システム

を實踐している。日本は石狩川流域に巨大システムが存在。それが永遠に維持出来るかは疑問だ。日本の食糧基地と観光や生活基盤を担っているが、将来は保障されていない。流域の人口動向を鑑みると、危機感を覚える。二五年には人口減の嵐。札幌を中心に人が流れて、ほとんどの地域は過疎化が進む。その時、現存する巨大システムをどう維持するか、最大の課題だ。

「水と衛生」を主題に上下水道システム研究会はアフリカのブルキナファソで「トイレ」普及を目指す「資源回収型排水」事業を行っている。しかし、日本とは違い自治体の財源と人材不足がネックで足踏み状態。けれど限られた水資源を有効活用して「循環型農業」

鈴木 英一 氏



昭和24年 夕張市生まれ
昭和50年 北海道大学工学部卒業
北海道開発庁(現 国土交通省)
平成19年 北海道開発局長
平成21年 北海道大学大学院工学研究院 特任教授
平成24年 北海道河川財団勤務

流域開拓〜この一世紀の成果

(第四回 四月二十七日)

(第三回 三月十五日) 北海道開拓の歴史を語る上で忘れてならないものはアイヌ民族への迫害。松浦武四郎の「蝦夷日誌」や一八七七年のアイヌ家族の写真(北海道付属図書館北方資料室)は極めて貴重だ。石狩川の治水事業は一九一〇年から開始して、ちょうど一世紀を数える。契機は二年前の最悪の洪水だった。角田村で三十四名の溺死という犠牲。この時、救助の労を採ったのはアイヌ族だったという。「治水対策」は新川、美唄川などのショートカ

食物を通して輸入率トップである「リン」の排出量は都市圏に集中、農業を基幹産業に位置づける地方は逼迫するはず。約五十年後に向けて「需給バランス」を考える政策が求

船水 尚行 氏



1953年生まれ。1972年北海道大学入学。1978年同大学院工学研究科衛生工学専攻修士課程を修了後、助手として採用され、講師、助教授を経て、2009年同大学院工学研究院教授。1995~96年米国カリフォルニア大学に客員教授で留学。

ット工事をはじめ、ダムや排水路により、農耕地は飛躍的に拡大。法律(明三十五土功組合法、昭和二十四土地改良法、同二十五北海道開拓法、同三十六農業基本法)を経て、同四十四年から開田抑制する。この一世紀、石狩川流域に国家投資は天文学的数値。今後も想定外の降水による「内水氾濫対策」は必要だ。その一環として、千歳川(洪水の源)の治水対策を重視、四市二町に「遊水池」を整備中だ。ドイツ・ライン川にもゲルマン発祥地を標榜する「アルテンハイム遊水池」のように有効利用して「ドイツの宝」にする構想だ。そこには人づくりを中心にした教育・環境活動が不可欠だ。石狩川流域も治水と農業が良いバランスで発展することを望みたい。

(第五回 五月三十一日)

められる。当然、自治体の連携など調整は不可欠。アフリカは限られる資源を最大限利用したシステムを作ろうとしている。そこに「金儲け」の意識が存在してもオーケーだ。身の丈に合った経済成長を目指そう。

石狩川流域の開拓は本州の場合と異なり、「治水と利水」は計画的に開発、言わば「二人三脚」で進められた。明治二年に設置した「北海道開拓史」で後の総理大臣になった黒田清隆が「屯田兵制度」を建白(施行期間明治八(三七))。同時に人材育成を目的に学校設置運動を展開した意義は大きい。北海道大学の前身である札幌農学校は東京大学の前身である駒場農学校より二年早く設置された。当初は「有畜畑作」が農業開発の方針だったが、明治二十年代か

ら「水田経営」が本格化。「赤毛種イネ」を導入、蛸足型の田植え機で水田は拡大した。殖民区画整備のために「北海道地形図」も完成(明二九)、泥炭地を利用する農法も確立される。しかし、第一次五カ年計画はうまく行かず、昭和二三の文芸春秋に「消えた八百億円」という中谷博士の批判記事が掲載されるエピソードもある。その後はやや順調だったが、問題は寒冷地での水資源の水温管理。温水地作りや用水路を幅広くしたり水深を浅くするなど考案して基盤整備して行く。一方、農業景観には歴史が含まれる。世界遺産である二千年前の人工構造物のアンシェントダムや中村医師が独力で拓いたアファガンの用水路などは、その象徴だ。石狩川にも多く河湖が残った。今後の意義ある利用を。